

唐初における鮮卑系官人の諸相

——和泉市久保惣記念美術館所蔵墓誌を中心に——

会 田 大 輔
齊 藤 茂 雄

はじめに

北魏は、鮮卑を中心とする非漢族の軍事力によって華北統一に成功した。そのため、北魏前期の高官の多くは、鮮卑系官人で占められており、孝文帝がいわゆる中国化政策を断行した後も、鮮卑系官人が政権中枢に位置していた〔吉岡一九九九〕。しかし、中央官を輩出した鮮卑系官人の一部は、北魏後半期になると徐々に文人化が進んだとされている〔長部一九九三／長部一九九五A〕。北魏分裂後、北鎮・オルドス・関中の非漢族が流入・活性化し、東魏・北斉や西魏・北周では再び鮮卑由来の官制・慣習や鮮卑語などが復活した。西魏・北周の非漢族系元勳とその子弟は西魏から隋代に至るまで軍事面で活躍した。ところが隋の楊（普六茹）氏・唐の李（大野）氏は、北周末には弘農楊氏・隴西李氏を標榜し、「漢人」として中国を再統一した¹。そのほかの非漢族系元勳の子孫も、唐初には非漢族的要素を喪失したと

されている〔長部一九九五B／長部二〇〇〇〕。

とはいえ、石見清裕氏は、李淵の皇后の一族である竇（紇豆陵）氏が隋末唐初にオルドスに勢力を保持しており、遊牧的要素を残していたことを指摘している〔石見一九九八〕。さらに、近年では平田陽一郎氏によって隋唐軍制中の遊牧的要素について研究が進められている〔平田二〇一一／平田二〇一四A／平田二〇一四B〕。これらの指摘を踏まえ、隋・唐初における非漢族系官人の存在様態について、検討を深める必要がある。

では、北魏初から唐初まで官僚を輩出した鮮卑系官人は、隋・唐初にどのような状態にあったのだろうか。本稿では大阪府の「和泉市久保惣記念美術館」に所蔵されている「陸妃墓誌」と「丘瑗墓誌」に着目したい。両墓誌とともに河南洛陽を本貫とし、北魏初から唐初まで系譜が確認できる鮮卑系官人の墓誌であり、唐初における鮮卑系官人の存在様態の一端に迫ることができる。両墓誌は未報告であるため、本稿ではその情報・録文を提示した上で、陸氏・丘氏の状況を比較し

ていく。なお、両墓誌の情報は明治大学文学部助教の梶山智史氏に提供していただいた。それを受けて、二〇一四年六月二十九日の予備調査の後、同美術館の橋詰文之氏の協力によって、八月三日に両墓誌の計測・撮影を含む実見調査を行うことができた。さらに、同美術館の厚意により、両墓誌を公表する許可も得た。改めて橋詰氏はじめ、久保惣記念美術館の皆さま、情報を提供してくださった梶山氏に深く謝意を示したい。本稿は、第一章については会田に、第二章については齊藤に、それぞれ文責がある。

第一章 河南洛陽陸氏と唐室李氏

— 「陸妃墓誌」を中心に — (担当…会田)

(一) 「陸妃墓誌」の概要

本章では久保惣記念美術館所蔵墓誌のうち、「陸妃墓誌」の録文・内容を提示した上で、唐初の河南洛陽陸氏の様相について論じたい。墓誌蓋は方形で、縦四四・八cm、横四四・八cm、厚一〇・三cmである。平頂覆斗型であり、文様は描かれていない。蓋面上には篆書で「大唐故／陸妃墓／誌之銘」(三行×三字)が陽刻されている。墓誌は縦四三・七cm、横四三・五cm、厚一一・一cmである。四側に文様は描かれていない。墓誌面上には、罫線と楷書で二〇行×満二〇字(七格空白・合計三九三字)が陰刻されている。墓誌の作成年代は、貞觀四(六三〇)年十二月である。墓誌と墓誌蓋の写真は、和泉市久保惣記念美術館『財団法人久保惣記念文化財団寄贈品図録』(和泉市久保惣記念美術館、二〇一一年)九六頁に掲載されている。以下に墓誌の録

文を示す。録文の行頭の数字は墓誌の原文の行数に対応している。

【墓誌録文】

- 〇一 大唐柱國・交州都督・遂安郡王故妃陸氏墓誌之銘
- 〇二 妃諱小娘、河南洛陽人也。七世祖俟、魏尚書令・司徒
- 〇三 公・東平王。祖玄、隨儀同三司・尚書考功侍郎・上庸
- 〇四 公。並器宇標舉、風猷爽亮、緯文經武、匡國贊時。
- 〇五 父彥術、大將軍・殷州獲嘉縣令。襟韻開朗、神彩照射。
- 〇六 妃分枝桂苑、挺秀芝田、風範幽閑、性理沉悟。恒葵之
- 〇七 居星月、未比柔明、巫洛之起雲霞、詎方婉麗。遂安王
- 〇八 地惟 帝族、人實國華、廣求邦媛、用膺嘉偶、三周既
- 〇九 備、百兩來迎、琴瑟克諧、松蘿並茂。武德七年三月授
- 一〇 拜遂安郡王妃。遂安王作鎮南蕃、褰帷導俗。妃內弘
- 一一 四德、外贊六條、譽滿闈闈、教流邦國。而五福無驗、偕
- 一二 老不從、煎玉釜而莫成、託金波而遂往。春秋三十有
- 一三 三、以唐武德八年十月廿日寢患薨於交州廡。越以
- 一四 貞觀四年歲次庚寅十二月辛卯朔十九日己酉、厝
- 一五 於長安城西南高陽原。乃爲銘曰、 高印薦祉、
- 一六 伊絡降靈、唯茲盛族、世載民英。允位騰氣、陰祇袁質、
- 一七 誕茲柔德、幽閑婉逸。珠慙魏國、玉愧藍田、四德允備、
- 一八 六行克宣。翟羽垂衣、鵲巢興詠、肅事藻蘋、虔蒸孝敬。
- 一九 閱川易往、陳馬難留、陽臺雲滅、洛水霞収。黼帳蕭條、
- 二〇 玄宮闕寂、月竈長空、仙房詎闢。唯餘合範、永騰金石。

(二) 北魏～唐初の河南洛陽陸氏

陸妃は武徳八(六二五)年に三三歳(かぞえ年)で没していることから、生年は開皇十三(五九三)年と推定できる。墓誌の二行目に「河南洛陽人」とあることから、孝文帝の洛陽遷都に従った非漢族(主に鮮卑系)の子孫であることがわかる。『元和姓纂』卷十・一屋・陸には「河南洛陽 代北より出で、代よ郡長大人と爲り、歩六孤氏を號す。後魏孝文洛に遷り、改めて陸氏と爲り、穆・奚・于・賀・劉・婁と北人八族と爲る」(一四二二―一四二三頁)とあり、河南洛陽を本貫とする陸氏は、代北の部族長出身で歩六(陸)孤氏を称していたが、孝文帝の洛陽遷都後に陸氏に改め、北人の代表的な家柄になったとする^②。墓誌には始祖伝説が見えず、本貫に続けて「七世祖侯、魏尚書令・司徒公・東平王」と記している。陸侯は、『魏書』卷四〇(九〇―一九〇四頁)に立伝されている代人(鮮卑系)であり、太武帝期に柔然攻撃や蓋呉の乱鎮圧に活躍し、長安鎮大將・内都大官などを歴任し、文成帝即位後、東平王に封ぜられ、太安四(四五八)年に没した人物である。陸侯の子孫は、北魏・北斉・北周に仕えて、軍事面で活躍するだけでなく、中央官・地方官としても評価された。また、陸氏は積極的に学問を習得し、范陽盧氏・博陵崔氏といった漢人郡姓と通婚・交流し、文人化が進んだ一族である[長部一九九五A]。

墓誌は七世祖を記した後、祖父玄の名をあげ、その間の先祖を記していない。陸玄の名は、『周書』卷二八・陸騰伝(四六九―四七三頁)および『北史』卷二八・陸侯伝附陸騰伝(一〇二二―一〇一四頁)に、陸騰(陸侯の玄孫)の子として登場する。『周書』・『北史』・墓誌をもとに陸侯から陸妃に至る系譜を示すと「陸侯―焯―珍(彌)―

旭―騰―玄―彦術―陸氏(小娘)となる。墓誌に名前がみえない陸騰は、北魏の東西分裂時に東魏に仕え、大統九(五四三)年に西魏の捕虜となった後、西魏・北周に仕えて潼州刺史・隆州総管などを歴任し、四川地域の異民族(蛮・獠)反乱鎮定に活躍した人物である。彼は天和六(五七二)年に柱国(戎秩・正九命)を拝受し、上庸郡公に封ぜられ、建徳二(五七三)年には大司空(冬官府長官・正七命)^③となったが、宣政元(五七八)年に没した。

『周書』卷二八・陸騰伝附陸玄伝(四七三頁)には、子の玄が陸騰の後を継いだとある。墓誌にみえる陸玄の封爵の「上庸公」は、陸騰の「上庸郡公」を襲ったものである。『周書』陸玄伝は、陸玄が東魏に取り残され、北斉に仕えて成平県令となり、建徳六(五七七)年の華北統一後に北周に仕え、地官府都上士(正三命)を経て、北周末に楊堅の大丞相府中兵參軍となったとする。正史には隋代の陸玄に関する記載がなく、墓誌の「儀同三司」(隋文帝期の散実官・正五品)・「尚書考功侍郎」(吏部尚書の部下・正六品)はその欠を補うものである。陸妃の父の彦術は文献史料にみえない。彼の就任した「大將軍」は、唐初の散実官(正三品)か武徳七(六二四)年以後の勳官(従三品)と思われる^④。また、『旧唐書』卷三九・地理志二・河北道(一四九〇頁)によれば、唐の武徳四(六二二)年から貞観元(六二七)年まで殷州が設置されており、この時期に獲嘉県令に就任した可能性が高い。

『元和姓纂』卷十・一屋・陸(一四二五頁)は、陸騰の子として逸・融・冰の名をあげるのみで、陸玄・彦術の名は見えない。陸融は、『周書』卷二八・陸騰伝附陸融伝(四七三頁)によると、若くして頭

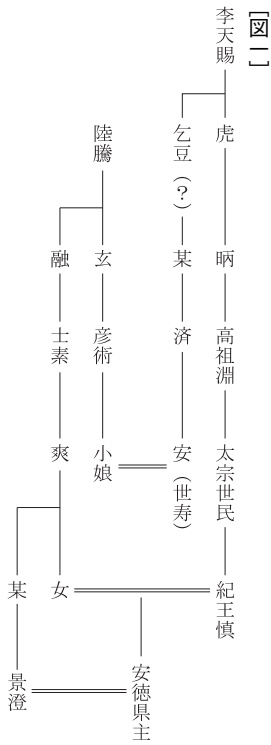
職を歴任し、北周末に大將軍（戎秩・正八命）を授けられ、定陵県公に封じられた。また、『元和姓纂』および乾封元（六六七）年に作られた紀王妃陸氏（陸融の曾孫）の墓碑「紀國先妃陸氏碑」⁵と垂拱二（六八六）年に作られた陸融の玄孫の「陸景澄墓誌」⁶によって、陸融が北周時代に兵部下大夫（正四命）となり、隋代に洛州刺史に就任したことがわかる。彼は西魏で生まれて北周に仕えたため、北齊に取り残された兄の女よりも官職が高くなったと考えられる。なお、『元和姓纂』と「紀國先妃陸氏碑」・「陸景澄墓誌」によって融の子の立素（唐・益州大都督府長史・太子右庶子）・爽（唐・庫部・兵部郎中）の官歴もわかる。「紀國先妃陸氏碑」に登場する紀王妃陸氏は、本稿で紹介している陸妃の再從姪（又從兄弟の子）にあたり、貞觀五（六三二）年に生まれ、貞觀十七（六四三）年に唐太宗の子の紀王慎⁷に嫁ぎ、六男八女を生み、麟德二（六六五）年に没した人物である。また、紀王妃陸氏の甥にあたる陸景澄は、紀王慎と陸妃の第四女である安德県主を娶っている⁸。

（三）陸妃と李世寿

「陸妃墓誌」の八―一―行目には、「遂安王、地は惟れ帝族、人は實に國華、廣く邦媛を求め、用て嘉偶に膺り、三周既に備はり、百兩來迎し、琴瑟克く諧ひ、松蘿並びに茂る。武徳七年三月授けられて遂安郡王妃を拜す。」とあり、遂安王と婚姻し、武徳七（六二四）年に遂安郡王妃を拜したことが記されている。このとき陸妃は三三歳である。

夫の遂安郡王は、唐宗室の李安（字は世寿）をさす。彼は正史に立伝されていないが、一九七〇年代に陝西省長安県郭杜鎮東祝村から、

貞觀十六（六四二）年に作られた「李世寿墓誌」が出土している。現在、墓誌は西北大学に所蔵されている。墓誌の外寸・録文・内容については、「葛承雍一九九七」にまとめられている。また、録文は『全唐文新編』（吉林文史出版社、二〇〇〇年）二〇冊二二七九六頁、『全唐文補遺』（三秦出版社、二〇〇七年）七冊二四四―二四六頁にも収録されている¹⁰。李世寿は、李淵の祖父虎の兄弟の曾孫（又從兄弟の子）である。「李世寿墓誌」には、祖父（魏の宜州刺史・靈寿县公）・父（隋の開府儀同三司・軍器大監・吉陽県開國公）の官爵が記されているのみで、その諱は記されていない。「王連龍二〇一二、六二頁」は、李世寿の孫の仁泰の墓誌を取り上げ、世寿の父の諱が「濟」であることを指摘する¹¹。しかし、『新唐書』卷七〇上・宗室世系表上（一九五七―一九五八頁）に、李濟・世寿の名前はみえない。宗室世系表には李虎の兄弟として起頭・乞豆の名をあげているが、起頭の子孫は途絶えたとする。一方、乞豆の子孫は定州刺史房として、子孫の名が伝えられている。李濟・世寿は乞豆の子孫の可能性が高いと思われる。これまで論じてきた陸氏と李氏の系図を示すと図一のようになる。ここから唐代前半期に唐室李氏と河南洛陽陸氏が通婚関係にあつ



たことがわかる。

「李世寿墓誌」と「葛承雍一九九七」に依拠して、李世寿の事績について簡単に確認したい。李世寿は、開皇元(五八一)年に誕生し、大業十三(六一七)年に李淵が太原で挙兵した際に関中で呼応し、銀青光祿大夫(隋煬帝期の散職・従三品)を授けられた。さらに長安を占領する際に功績を建て、左光祿大夫(隋煬帝期の散職・正二品)を授けられ、唐の武徳二(六一九)年には右親衛車騎將軍(隋文帝期の官品は正五品)に任じられ、吉陽東開國公・食邑一千戸を襲爵し、武徳五(六二二)年には遂安郡王・食邑五千戸に改められた。また「陸妃墓誌」の記述から武徳七(六二四)年に陸妃を娶ったことがわかる。この年、李世寿は四四歳である。両氏の婚姻の背景は不明である。

李世寿は、武徳七(六二四)年に交州都督・交州刺史に就任した。陸妃も交州に同行したが、武徳八(六二五)年十月に三三歳で交州の庁舎で病死してしまった。「李世寿墓誌」は、彼の善政ぶりを述べたのち、彼が長いこと病を患っていたため、何度も交州からの帰還を求め、貞観元(六二七)年に許されて長安に戻ったとする。しかし、『旧唐書』卷六九・盧祖尚伝(二五二頁)には「貞観の初め、交州都督・遂安公壽貪冒を以て罪を得。」とあり、李世寿が貞観初めに貪冒を理由に免職されたことが記されている。「葛承雍一九九七、四四九頁」は、墓誌が李世寿を顕彰するため、悪政を糊塗し、善政を偽ったとする。「郁賢皓二〇〇一、一四九―一五〇頁」に依拠して、李世寿前後の交州都督を示すと「武徳五年・丘和↓武徳七年・王志遠↓武徳七年・李世寿↓貞観元年・李大亮」となる。「陸妃墓誌」の記

述から、李世寿の交州都督在任時期が武徳七年～貞観元年であることが傍証できる。陸妃は、李世寿が貞観元(六二七)年に長安に帰還したのち、貞観四(六三〇)年十二月に長安城の西南の高陽原に葬られた。「李世寿墓誌」によると、長安帰還後の李世寿は官職につかず療養に努めたが、貞観十六(六四二)年に六二歳で没した。

最後に唐初の洛陽陸氏についてまとめると次のようになる。洛陽陸氏は北朝後期の段階で既に文人化が進んでいた。北周に仕えた陸騰は軍事面で活躍したが、その子孫は中央官僚・地方官となり、軍人色は薄れていった。「陸妃墓誌」からも非漢族的要素は窺えなかった。唐初の陸氏は、既に鮮卑的要素を喪失していたとみてよいだろう。その一方で陸騰の子孫と唐室李氏は婚姻を重ねており、唐建国後も陸氏の名望が高かったことが窺えた。

第二章 河南洛陽丘氏と庫真

―「丘瑗墓誌」を中心に―(担当・齊藤)

(一)「丘瑗墓誌」の概要

本章では「丘瑗墓誌」の録文・内容を提示した上で、唐初の河南洛陽丘氏の様相について検討したい。本墓誌は縦六一・二cm、横六〇・八cm、厚十二cmである。墓誌側に十二支像の線刻があり、字数は二七行×満二七字で、縦横に罫線が入っている。墓誌蓋は所蔵されていない。墓誌写真はい「和泉市久保惣記念美術館新収蔵品図録」(和泉市久保惣記念美術館、二〇〇二)の五〇頁にあるが、写真が小さく文字の判別に堪えるものではない。これまで録文は発表されたことがなく、

橋詰氏によれば拓本も未採取とのことである。以下に墓誌の録文を示す。録文の行頭の数字は墓誌の原文の行数に対応している。

【墓誌録文】

〇一 故明威將軍・守右内率府副率・帖右武衛將軍・柱國・丘府君墓誌銘并序

〇二 翊鷹副尉・守殿中進馬・驍騎尉・太原郭誠撰

〇三 公諱瑗、字岳、河南洛陽人也。有唐昌意之源、後魏孝文之派。託天跋地、

〇四 雄略當時、平北安西、賢良間出、抑有由也。曾祖諱師利、皇左監門將

〇五 軍。祖諱英起、皇秦王府左庫真。父諱義瞻、皇朝散大夫・晉州霍邑

〇六 縣令、追贈晉州司馬、尚芙蓉縣主。公即主之第二子。幼解挽滿、冠能中

〇七 石、氣壓諸傑、力過絕人。家世將門、誓無顛墜。永昌初、拜洛放選、尋應武

〇八 藝超絕科、天下第一。制授左屯衛執戟、無何、擢試同州濟北府左果

〇九 毅兼知右廂隊仗。恭勤整肅、無替其能。勅拜公游擊將軍・左衛率府

一〇 郎將。朱紱形貴、武賁益重。又轉左羽林中郎、北軍孤兒以天威、西苑文

一一 馬以雲氣。皆壯公節美公奇。交馳國容、讐伏戎醜、實一時之盛矣。不幸

一二 丁主憂、喪感終制、除右内率府副率、前後攝帖敷衛將軍。上國有大慶、

一三 領功行償、而葺階累勳、增明威將軍・柱國、長帖右武衛將軍。上歟。夫父

一四 以子貴寵存、及歿揚名顯親、亦舉朝稱美矣。公性質直、心堅強、長六尺

一五 四寸、秀眉明目。蓋敬武之子、雅好盤遊、魯恭之孫、精修第宅。不談人之

一六 短、口無擇言、不銜己之長、行必存信。嗚呼、心腹已委、爪牙未施、夙中瘡

一七 渴、□加水氣、以開元十九年三月甲戌、終於崇賢里之私第。春秋五十

一八 有九。公之伉儷曰平陽郡君郭氏、溫柔聰惠、有足稱焉。男光國・光烈・光

一九 胤・光野等、並兵吏常選、不改父道、足恭母慈、傾茲餘祿、確成大事。即以

二〇 其年七月癸酉、安葬於長安縣福陽鄉平原。禮也。天有神兮地有祇、天

二一 好正直兮神不欺、家有國兮榮有寵、家出衣冠兮國所重。高陽之陌、陪

二二 父祖十里之塋、好時之田、留子孫百代之業。其詞曰、二三 承膺寶曆、出魏天府、立國立家、允文允武^其。藝業神授、勲庸

意取、一舉
二四 風塵、再遷廊^其。秀質魁傑、正言規矩、女可配妃、男堪尚主

三其。旌勤寵

二五 命、冠玉腰金、□節階陞、馳聲羽林^{四其}。東宮北闕、白首丹心、歲不我與、纏

二六 綿禍^{五其}。盛儀曉吹、木葉秋陰、掃空墳壟、冥途日深^{六其}。

二七 □□郎・行彭州參軍事・郭味玄書

(二) 北魏〜唐初の河南洛陽丘氏

墓誌によると、墓主丘瑗は唐初の功臣である丘和の玄孫であり、開元十九(七三一)年七月にかぞえ五九歳で死去しているので、生年は咸亨四(六七三)年である。丘氏は『魏書』卷一一三・官氏志(三〇〇五―三〇〇六頁)において、獻帝の時代に分かれたとされる十姓のうちのひとつに数えられており、もとは「丘敦氏」と言った。『元和姓纂』卷五・十八尤・邱(七〇八頁)には、丘氏の初代とされている「豆折真から丘和に至る系譜が記されている。しかし、北魏後期以降の丘氏については正史に記述がなく、詳細は不明である。『旧唐書』卷五九・丘和伝(二三二四―二三二六頁)によれば、丘和(瑗の高祖父)の父は北魏の鎮東將軍であった丘寿である。経緯不明であるが北周に仕えた丘和は開府儀同三司となり、隋文帝期に右武衛將軍となり、煬帝期に交趾太守となった。隋が滅亡すると蕭銑に帰属し、蕭銑が滅ぼされると唐に降って交州総管に任命され、その後、左武侯大將軍となった。丘和の子では丘行恭の名前が最も知られており、兄の師利とともに関中で挙兵した後、太宗に仕えて活躍し、左衛將軍・右武侯將軍を歴任し、高宗即位後は右武侯大將軍となった『旧唐書』卷五九・丘行恭伝(二三二六頁)」。その子の神勳は、左金吾衛將軍とな

り、則天武后期の酷吏として知られている『旧唐書』卷一八六上・酷吏伝(四八四三頁)」。そのほかの丘和の子孫については、『元和姓纂』卷五・十八尤・邱(七〇九―七一頁)に詳細な記載がある。

とはいえ、『元和姓纂』には丘和の子の師利とその子孫の情報がなく、詳細不明であったが、近年、師利の墓誌¹⁴とその子の英起(瑗の祖父)の墓誌が発見され、それぞれの墓誌蓋・墓誌の拓本写真が趙君平・趙文成編『秦晋豫新出土墓誌搜佚』(国家図書館出版社、二〇一二年)の、一三五―一三六頁と、一三九―一四〇頁に収録されている。また、「丘師墓誌」は「郭茂育二〇一二」にも拓本写真と一部の録文が、「丘英起墓誌」は斉運通編『洛陽新獲七朝墓誌』(中華書局、二〇一二)の七〇頁と「郭茂育・顧濤二〇一三」に拓本写真が紹介されている¹⁵。

丘師利(瑗の曾祖父)は、大業元(六〇五)年に千牛で起家した。その後、隋末の混乱時には、『旧唐書』卷五九・丘行恭伝(二三二六頁)に「大業の末、兄の師利と兵を岐雍の間に聚め、衆一萬有り、故郿城を保てば、百姓多く之に付き、羣盜敢えて境に入らず。初め、原州の奴賊數萬人扶風郡を圍むに、太守竇璡堅く守り、數月を経たり。賊中食盡き、野に掠むる所無ければ、衆多く離散し、行恭に投ずる者千餘騎なり。行恭其の酋渠を遣はし諸奴賊を説き共に義軍を迎えしむ。(中略)行恭其の衆を率いて師利と共に太宗に渭北に謁し、光祿大夫を拜す」とあるように、故郿城で一万の兵を集め、周囲の奴賊を従わせ、李淵の長安進攻時に帰順した。ただし、丘師利・行恭が故郿城で勢力を拡大できた背景については不明である。「丘師墓誌」によると、その後、彼は群雄討伐に参加し、左驍衛將軍・左監門將軍・冀

州都督を歴任した。子の英起は、秦王府の右庫真で起家した後、左牛備身・左屯衛竜泉府果毅都尉を歴任した。英起の子の義贍（瑗の父）については、「丘瑗墓誌」に記載があり、唐の晋州霍邑県令となり、芙蓉県主を娶ったことが記されている。「丘瑗墓誌」によると丘瑗は県主の第二子である。『元和姓纂』や「丘師墓誌」・「丘英起墓誌」・「丘瑗墓誌」によって丘氏の系図を示すと次の図二のようになる。



丘瑗自身の事跡については、墓誌の七八行目によると、「永昌の初め、洛を拜するに放選せられ、尋いで武藝超絶科に應じ、天下第一なり」とあることから、永昌元（六八九）年に則天武后が拝洛した際に、科挙試験を免除されたようだ。このことは、『旧唐書』卷一八九上・儒学伝上（四九四二頁）に、「是の時、復た將に親しく明堂及び南郊を祠らんとし、又た洛を拜し、嵩嶽を封ぜんとするに、將て弘文・國子の生を取りて齋郎行事に充て、皆な出身・放選せしめ、前後勝げて數うべからず」とある記事と対応する。「武藝超絶科」については、『登科記考補正』「二六九、一七二頁」は、『旧唐書』卷七・中宗紀（一四三三頁）に、「（神龍三（七〇七）年正月）庚戌、默啜邊を寇するを以て、制すらく猛士の武藝超絶なる者を募り、各おの自擧せしめ、内外の羣官は各おの突厥を破滅するの策を進めよ」とある記事

を引き、突厥第二可汗国の第二代可汗である默啜に対処するため七〇七年に設けられたとする。それゆえ、墓誌では「尋いで」とあるのだが、実際には放選から応科まで八年の空白期間があったことになり。なお、『登科記考補正』によれば、この武藝超絶科はいわゆる武挙の一種である。

その後、丘瑗は左屯衛執戟から同州濟北府左果毅兼知右廂隊仗、左衛率府郎將、左羽林中郎、右内率府副率、右武衛將軍などの禁軍職を歴任し、開元十九（七三一）年に死去している。

彼の妻の平陽郡君郭氏の家柄などは、典籍史料に現れないため明らかではない。撰者の郭賊や書者の郭味玄も典籍史料に現れず不明であるが、墓主の妻と同姓であることから、同族であると考えられよう。

（二）庫真について

本墓誌の特色のひとつとして、祖父・丘英起が就任した「庫真」という官称号がある。この官名は鮮卑語に由来するとされ、北朝隋唐が北魏以来の鮮卑起源の制度を保持していた例として、注目を浴びている。庫真を最初に鮮卑由来と示唆したのは池田温氏である〔池田一九七九、二七一頁、注二〕。池田氏は『旧唐書』卷四二・職官志一（一七八四頁）に、唐初の王府に「庫直」なる官職があったと記録されていることに着目した。そして、これを北魏の官職である「直真」と関連付けて、鮮卑語の官職名だろうと指摘した。その後、墓誌の発見数増加によって実例が増えていく中で、嚴耀中氏は官職としての庫真の性格付けを行い〔嚴二〇一三、五〇―五五頁〕、平田陽一郎氏は、北朝隋唐における遊牧軍制の影響を考察する際に、庫真についても検討

を加えている「平田二〇一一／平田二〇一二／平田二〇一四B」。なお、平田氏によれば、墓誌には「庫真」としか現れないため、『旧唐書』職官志の「庫直」という記述は伝世による誤写と考えられる「平田二〇一一、五一頁」。以上のような先行研究に基づき、庫真について現状で判明している点を述べると以下のようになるだろう。

庫真とは、東魏・北齊・隋・唐初で確認される官職であり、皇帝や諸王に仕える側近官である「嚴二〇一三、五一頁／平田二〇一一、四九―五〇頁」。そして、上述した通り、鮮卑語の官名であると考えられる。というのも、つとに白鳥庫吉氏が、北魏の官制中において語尾に「真」という文字が付くものが多いことに着目し、「真」はトルコ語系言語で「人」を表す $+\text{眞}$ あるいは $+\text{眞}$ という接尾辞の音写であろうと述べている「白鳥一九七〇、一七〇―一七二頁」からである。鮮卑語の言語系統は確定していないものの、平田氏が指摘するように「平田二〇一一、五〇―五一頁」、庫真の「真」も、同じく鮮卑語の接尾辞と考えるべきである。「真」が付く官名は、北魏前期においては、鮮卑の伝統を色濃く受け継いだ内朝官に多く、鮮卑系の官僚が就任する役職であった「川本一九九八、一八九―二〇八頁」。

それならば、庫真も北魏から存在する官職である可能性が高いだろう。ところが、北魏には多くの「真」の付く役職が存在しているにもかかわらず、今のところ庫真の存否は不明と言わざるを得ない。北魏と無関係とは到底考えられないので、今後の検討課題であろう。また、上述したように、庫真は北周でその存在が確認できないが、平田氏は北周において側近官として現れる「親信」も、鮮卑的伝統に属す

存在であると解釈し、親信と庫真は上下の差がない近侍官であると述べている「平田二〇一一、五一頁／平田二〇一二、三四五―三四六頁」。

結局のところ、なぜか北魏には見られないが、その後の北朝隋唐諸政権にみられる、鮮卑由来の側近官が庫真なのである。庫真就任者の特徴としては、名門貴族の子弟が起家官として就任することが多く、君主・諸王の拔擢によって任じられ、その側近として親密な関係を築くという「嚴二〇一三、五三―五四頁／平田二〇一一、四九頁」。

庫真の職務については、嚴氏は、唐初においては様々な官職を兼ねる場合があり、単なる親衛武官ではなくなつて文官としての職務を帯びるものが現れたと述べている「嚴二〇一三、五四―五五頁」。嚴氏は庫真をあくまで官職の一種ととらえているため、唐代に文武両様となつた庫真の職務がいかなるものか、性格解明に苦慮している。しかし、平田氏は、庫真とは主人との人的紐帯で結ばれた存在であり、一度親信・庫真になればその関係は他官に移つたとしても変わらないものであるとする「平田二〇一一、五二頁」。平田氏の意見を踏まえれば、庫真は官職というより側近集団に入ることができたものだけが帯びる、一種の特権的称号であると考えられる。庫真が職務と無関係な称号であるとするれば、いかなる職種の官を兼任したとしても矛盾はないだろう。

本墓誌においては、祖父・英起が、唐の太宗李世民が即位前に開いていた秦王府の左庫真に就任していたことが五行目の記述から分かる⁽¹⁷⁾。丘英起の父である丘師(利)は唐の長安進攻時に帰順しており、墓誌によると高祖から左光祿大夫・郿城郡開國公・柱国・左驍衛將軍

の位をあたえられている。丘氏が北魏から続く鮮卑系の家柄であるという点も考慮すれば、丘英起の授官は、庫真が名門貴族の子弟に与えられるという嚴氏の基準に合致するだろう。

また、「丘瑗墓誌」において、祖父・丘英起の官名を示す際に、庫真によって代表させた点は大変興味深い。「丘英起墓誌」によれば、彼は秦王府の右庫真を皮切りに、左千牛備身、竜泉府果毅都尉を歴任している。にもかかわらず、「丘瑗墓誌」には起家官である庫真しか挙げられていない。このことは、丘瑗の一族にとって先祖が庫真であったということこそ記録すべきであり、名譽と考えられていたことを示しているだろう。嚴氏は、墓誌の表題に挙げられた官名として起家官である庫真が引き合いに出される例があることから、庫真への就任は後代の人たちにとって名譽なことであったと指摘している。「嚴二〇一三、五五頁」。本墓誌の記述もまた、少なくとも開元年間までは、その傾向が根強かったことを示しているよう。先祖が庫真であったことは子孫たちにとってどのような意味があったのか、今後検討すべき課題である。

以上、「庫真」という鮮卑語由来の特殊な官称号に着目した。北朝隋唐の諸王朝が、鮮卑起源の官制を脈々と受け継いでいたことは、中央ユーラシア遊牧民が中国史に与えた影響の強さを物語る一例となる。そのうえ、この官称号は遊牧国家の特徴のひとつとされる侍衛組織と無関係ではなく、中央ユーラシア史の観点からも注視に値する。

五胡十六国の時代にモンゴル高原から南下し、北中国で北朝隋唐政権を打ち立てた鮮卑系遊牧民が、時が経つにつれどのように変質していったのか、という問題は、彼らの「漢化」という結論によって片付

けられる場合が多い。もちろん、数百年の間に新天地で文化・慣習が変容し、新天地の文化に埋没していったという推測に異存はないが、すべての文化・慣習が消えていったかどうかは、なお検討の価値がある。庫真という官称号の残存は、中央ユーラシアの遊牧民が中国に入っても遊牧文化を（一部であったにせよ）保持し続けたことを示唆する事例であるといえよう。

おわりに

本稿では、未報告であった和泉市久保惣記念美術館所蔵の「陸妃墓誌」と「丘瑗墓誌」の録文を提示した上で、唐初における洛陽陸氏と丘氏の様相について検討してきた。両氏とも河南洛陽を本貫とする北魏初から続く鮮卑系官人であり、唐代には皇室と通婚関係にあった。しかし、陸氏が北朝時代から文人化が進み、隋唐時代には軍事色が薄れ、鮮卑的要素を失っていたのに対し、丘氏は北朝から唐初まで軍事面で活躍し、禁衛就任者を輩出していた。その主な原因は唐朝に仕えた経緯の相違にあると思われるが、北朝隋唐期の文人化の差異も関係している可能性がある。このように、「鮮卑系」とひとくちに言ってもその存在形態は様々であり、唐における彼らの歴史的意義を理解するためには、個々の事例を丹念に検討していくほかはない。それでも、唐初に皇室と通婚があったことから分かるように、その存在意義は決して低いものではなかった。文人か武人か、漢化したかしていないかという議論に加えて、彼らの血統が持つ意義も注視し続ける必要があるのは間違いない。庫真のような独自の官称号に対する検討

も含め、隋唐期における鮮卑系の存在形態は今後も検討を続けていく必要がある。

なお、日本に未報告の墓誌があることに驚きを隠せないが、過去には明治大学東アジア石刻文物研究所が個人蔵の唐代墓誌六基・鎮墓文四基の寄託を受けた例もあり「氣賀澤編二〇一〇／氣賀澤二〇一二」、まだ知られていない墓誌が眠っている可能性はあるだろう。今後可能な限り情報を集め、新たな史料の収集に努めていきたい。

注

- (1) そのほか、李弼一族が非漢族であることは、「前島二〇一三」参照。
- (2) 『魏書』卷一一三・官氏志(三〇一四頁)では穆・陸・賀・劉・樓・于・嵇・尉を八姓とする。
- (3) 西魏の廢帝三(五五四)年正月に、正九命を頂点とする命階が設定され、恭帝三(五五六)年正月に『周礼』に基づく六官制が施行された。北周の六官制については、「王仲犛二〇〇七」参照。
- (4) 「速水二〇一五」参照。
- (5) 「呉綱主編一九九三」一六六一―一六八頁参照。
- (6) 陸景澄については、「趙力光主編二〇一四」六一番の垂拱二(六八六)年作成「陸景澄墓誌」参照。
- (7) 李慎については、『旧唐書』卷七六・太宗諸子・紀王慎伝(二六六四頁)参照。
- (8) 前掲注(6)「陸景澄墓誌」参照。
- (9) 「国家文物局主編一九九八」下冊一〇七頁参照。「長安県志編纂委員会編一九九九」七八三頁にも、保管地に関する記載がある。
- (10) 「李世寿墓誌」の関連情報については、陝西師範大学高級進修生の堀井裕之氏の御教示を得た。記して深謝申し上げたい。
- (11) 「趙力光主編二〇一四」六三番の垂拱四(六八八)年作成「李仁泰墓誌」参照。

(12) 唐初の勳官制度の変遷については、「速水二〇一五」参照。

(13) 唐は、武徳元(六一八)年六月・十月、武徳五(六二二)年十一月

・十二月の四度にわたって宗室を郡王に封じている。『旧唐書』卷一・高祖紀・武徳元年六月および十月条(七一八頁)、『資治通鑑』卷一九〇・唐紀六・武徳五年十一月および十二月条(五九六一頁)参照。なお、武徳九(六二六)年十一月に宗室の郡王の封爵が県公に改められると、李世寿も遂安県公・食邑一千戸となった。『旧唐書』

卷二・太宗紀上・武徳九年十一月条(三二頁)参照。

(14) 丘師利本人の墓誌では、彼の名前は「丘師」と記録されているが、その理由は不明である。

(15) 丘氏一族の墓誌の情報については、陝西師範大学高級進修生の堀井裕之氏の御教示を得た。記して深謝申し上げたい。

(16) この女性は唐宗室の娘である可能性があるが、詳細は不明である。ただし、「丘英起墓誌」では、「右庫真」になったと記されている。

(17) 遊牧民における人的結合原理であり、人材登用の機能もあつた侍衛組織については、モンゴル帝国のケシクとその中核となつたノコル(ネケル)については、最もあり有名であり、多くの先行研究がある。たとえば、「片山一九八〇」、「森平二〇〇一」、「池内二〇〇九」などを参照のこと。このモンゴルにおける侍衛制度の研究成果に基づき、北

魏「川本一九九八／川本二〇一五」、契丹「加藤二〇一一」、西夏「佐藤二〇〇七」、満洲「増井二〇〇一／杉山二〇一五」など多くの中央ユーラシアの国家に同様の侍衛制度が存在していたことが指摘されている。「平田二〇一一」の庫真研究もこうした動向に即したものである。

参考文献

- 『魏書』／『周書』／『隋書』／『北史』／『旧唐書』／『新唐書』／『資治通鑑』／『元和姓纂』／中華書局標点本
- 池内功二〇〇九「チンギス・ハン帝国における人的結合の原理―ノコルを中心に―」『四国学院大学論集』一三〇、三三―七四頁

- 池田温一九七九「唐朝処遇外族官制略考」『唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、二五一―二七八頁
- 石見清裕一九九八「唐の建国と匈奴の費也頭」『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、一七―六三頁
- 長部悦弘一九九三「元氏研究―北朝隋唐時代における文人士大夫化の一軌跡―」『中国中世の文物』京都大学人文科学研究所、四一―四五六頁
- 編 一九九五A「陸氏研究」中国中世研究会編『中国中世史研究 続編』京都大学学術出版会、三三三―三三七三頁
- 一九九五B「劉（独孤）氏研究」『琉球大学法文学部紀要 日本・東洋文化論集』一、三二九―三六三頁
- 二〇〇〇「于氏研究」『琉球大学法文学部紀要 日本・東洋文化論集』六、七一―一三三頁
- 片山共夫一九八〇「怯薛と元朝官僚制」『史学雑誌』八九―一二、一―三三頁
- 加藤修弘二〇一二「遼朝北面の支配機構について―著帳官と節度使を中心に―」『九州大学東洋史論集』四〇、七―九一頁
- 川本芳昭一九九八「内朝制度」『魏晋南北朝時代の民族問題』汲古書院、一八九―二二七頁
- 二〇一五「北魏内朝再論―比較史の観点から見た―」『東アジア古代における諸民族と国家』汲古書院、一〇五―一三七頁
- 氣賀澤保規編二〇一〇「明大寄託新収の中国北朝・唐代の墓誌石刻資料集―その紹介と解説―」『古代学研究所紀要』一三、一―六八頁
- 二〇一二「新発現的彭尊師墓誌及其鎮墓石―兼談日本明治大学所蔵墓誌石刻―」『唐史論叢』一四、六九―八〇頁
- 佐藤貴保二〇〇七「西夏の二つの官僚集団―十二世紀後半における官僚登用法―」『東洋史研究』六六―一三、三四―六六頁
- 白鳥庫吉一九七〇「東胡民族考」『白鳥庫吉全集 第四卷 塞外民族史研究 上』岩波書店、六三―三二〇頁
- 杉山清彦二〇一五「清初侍衛考―マンジュウ大清グルンの親衛・側近集団―」『大清帝国の形成と八旗制』名古屋大学出版会、一五七―二一七頁

- 速水大二〇一五「唐代勳官制度の成立」『唐代勳官制度の研究』汲古書院、四三―六九頁
- 平田陽一郎二〇一一「西魏・北周の二十四軍と「府兵制」」『東洋史研究』七〇―二、三一―六五頁
- 二〇一二「北朝末期の「親信」について」『沼津工業高等専門学校研究報告』四六、三四―三六六頁
- 二〇一四A「隋代の「給使」について」『沼津工業高等専門学校研究報告』四八、二五―二五六頁
- 二〇一四B「皇帝と奴官―唐代皇帝親衛兵組織における人的結合の側面―」『史滴』三六、五二―七八頁
- 前島佳孝二〇一三「北周徒何綸墓誌銘と隋李椿墓誌銘―西魏北周支配階層の出自に関する新史料―」『西魏・北周政権史の研究』汲古書院、三八―四二七頁
- 増井寛也二〇〇一「グチュグチ考―ヌルハチ時代を中心として―」『立命館文学』五七二、二五―六六頁
- 森平雅彦二〇〇一「元朝ケシク制度と高麗王家―高麗・元関係における禿魯花の意義に關連して―」『史学雑誌』一一〇―二、六〇―八九頁
- 吉岡真一九九九「北朝・隋唐支配層の推移」『岩波講座世界歴史9 中華の分裂と再生』岩波書店、二五五―二八六頁
- 葛承雍一九九七「新出唐遂安王李世壽墓誌考釈」『唐研究』三、四四五―四五頁
- 国家文物局主編一九九八『中国文物地図集 陝西分冊』西安地圖出版社
- 郭茂育二〇一二「新出土唐《丘師墓誌》及其書法」『書法』二〇一二―七、四三―五一頁
- 郭茂育・顧濤二〇一三「新出土唐《丘英起墓誌銘并序》」『書法』二〇一三―八、二六―三三頁
- 王連龍二〇一二「跋唐杜佑妻李氏墓誌」『中国国家博物館館刊』二〇一二―一〇、五九―六二頁
- 王仲華二〇〇七『北周六典』中華書局、初版一九七九年
- 呉綱主編一九九三『昭陵碑石』三秦出版社

- 徐松撰・孟二冬補正二〇〇三『登科記考補正』北京燕山出版社
嚴耀中二〇一三「述論唐初期的庫真与察非掾」『晋唐文史論稿』上海人民出版
社、五〇—五九頁
郁賢皓二〇〇一「唐刺史考全編訂補」『南京師大學報（社會科學版）』二〇
〇一—一三、一四七—一五五頁
長安縣志編纂委員會編一九九九『長安縣志』陝西人民教育出版社
趙力光主編二〇一四『西安碑林博物館新藏墓誌統編』陝西師範大學出版總
社有限公司

（云田大輔 日本學術振興會特別研究員（PD））
（齊藤茂雄 關西大學東西學術研究所非常勤研究員）